

いってきましたコロンビア！

氏名：吉永 加那

派遣国：コロンビア共和国

派遣期間：2002.4～2004.9

短大卒業後、施設栄養士を経て、青年海外協力隊に参加。帰国後協力隊参加後は保育園に勤務。その後現在は神奈川県内の小学校に勤務中。



首都：ボゴタ
面積：日本の約3倍
人口：4200万人
言語：スペイン語
宗教：キリスト教

要請の背景

コロンビアは、政府、マフィア、ゲリラの闘争が現在も続いている内戦国。ゲリラに土地を追いやられる家族、福祉の行き届かない社会、失業者の増加、そして治安の悪化・・・これらの影響を一番受けているのは一般庶民である。

そのため、貧富の差も激しく、たとえ栄養的により重要な時期を過ごす成長期の子供や妊婦であっても、家庭の経済状況等の事情により安定的に食物へアクセスできる環境でないのが現状である。

そこで、配属先 NGO が学校給食的な機能を果たし貧困層の子供や妊婦を対象とした、昼食提供プログラムをおこなっており、そこへ派遣されることとなった。

配属先と要請内容

NGO ノートゥールに配属。

要請内容は、①現行の献立の分析と修正、改善の提案、②市内の各食堂における、子どもたち(約8000人)の身長体重測定、その分析、改善の提案③現地スタッフ、調理員、保護者等に対する講習会の実施などであった。

活動

◎1年目

とにかくコロンビア人栄養士、その他現地スタッフについて各食堂を巡回しながら、また普段の日常生活を送りながら、コロンビア人の知り合いや友人を増やし仕事の仕方、考え方、食生活、町の地理などを学ぶ。寝ている時以外は、できるだけ人と会話するようにする。職場の人からは、“焦らなくてもいいのよ”と言われつつも、自分が何も役に立てずにいることに、このままでいいのかと焦る。

◎2年目

職場にも生活にも慣れてくる。給食管理業務に忙しいコロンビア人栄養士から、講習会の依頼等が入り始め、準備をサポートしてもらいながら、本番は2人ワンセットになって補い合いながら講習会、調理実習を始める。大豆を使った新メニューの開発などを調理員らと共にすすめる。

◎3年目(任期延長の6ヶ月間)

配属先が大きな給食センターになったことに伴って新メニューが稼動し始める。

食物へのアクセスのリスクが高いことも

(意味がわからない)が、プログラムからもれないよう、身体計測に加えソーシャルワーカーらと共に、子どもたちの家庭訪問を本格的に進めていく。栄養に関する講習会等の題材をまとめる。

活動を振り返って

帰国して3年以上たった。今でも、首都での語学訓練を終えて、配属先へ向かう飛行機の中で味わった、あのなんともいえない不安と緊張を忘れられない。

駒ヶ根訓練所でも、首都での語学訓練でも自分は学ぶ方、受身の立場だったのが、反対に“今日から私は何かの役に立たねば、もし役に立たなかったらどうしよう”という、焦りとプレッシャーでいっぱいになってしまった。

今思うと、頭の中は栄養改善というゴール(結果)ばかりが先行していたため、私に何ができるのかわからず、ただ不安だったのかもしれない。

いざ活動が始まってみると、現地スタッフの方が経験も豊かで、人間的にも成熟した人ばかりだった。(講習会のその堂々とした態度と説得力のある雰囲気、何度口を開けっ放しにしたことか。)一方の私は日本でのほんの3年の経験と、日本から守り神として、たくさんの方々の栄養に関する参考書等を抱えて出発した身。

活動が始まるまでは、教科書にある理想が1つの答えで、それを伝えてよりよい食習慣を身につけてもらえれば・・・などと考えていた。

それがどうしたことか、いろいろな立場にいるコロンビア人(子供、その家族、職場の仲間、調理員、貧困層・富裕層の人々など)と日々接するうちに、健康な心身とは一体なんだろう、一人一人にとっての幸せってなんだろうという疑問が。そして、随分と自己中心的な理想ばかりおいかけている自分に気づき始めた。

道は一本でない、一緒に道を探すことが私がコロンビアでできる活動なのではと1年を終えて思い始めた。そして自己満足の思いやりでなく、本当の思いやりと専門性をもつことの大切さと難しさを感じた。

子どもたちの安定的な健康の確保には長意時間がかかるだろう。でもその目的に向かっていろいろな人が関ることは、誰が上でも下でもなく、子どもの成長とそこに関わる人々の成長の両方に繋がっているように思えた。

今後も、多くの人々と感動したり学びあいながら仕事をしていきたいと思っている。